

# 黄色に「安らぎ」を届けたい



インタビュー

長富 彩さん

も私の主観・直感によるものですので、皆さまにも自由に色をイメージしていただければと思います。演奏順はまだ思案しているうちに「お話が〈色〉から逸れますが、演奏会の最後に演奏する予定のリスト『孤独の中の神の祝福』は、私が2011年6月にリリースしたCDアルバム『リスト巡礼』に収録した曲です。レコーディングが東日本大震災から間もない時期だったこともあり、そのとき演奏を聴いていた録音関係の皆さんが涙を流してくださいましたことを今も忘れません。アルバムを買っていただいた方からも『涙が出た』という感想をいただきました。それほど人々の心に沁みる曲です」

## 作品の見方が明瞭に

シリーズ第2回までで、長富さん自身、どのような手応えがありましたか。〈色〉を設定してシリーズでやることってなかなかないでしょうが、

聴き手の皆さまから『テーマがおもしろい』『いろいろ考えこんだね』などと言っていたので嬉しんです。第2回の赤色の後には、ファンの方々から『スペインものが聴けて嬉しい』『これからもスペインものをどんどん弾いてほしい』という感想・ご希望をいただきました。『次の黄色、楽しみにしています』って声も受けています。

私は、理論よりも感覚優先でピアノ

を弾くタイプなので、前々から〈色〉を想い浮かべながら演奏していました。しかし、このシリーズを機に改めて音楽と色について考えていくと、今までなんとなくやってきたことがはっきり意識できるようになり、作品の見方が明瞭になったり、中には変わるものもあります。ですので、やりがいを感じています。

## 家事・育児と掛け持ち

ところで、長富さんは演奏活動の一方で家庭のお世話、育児もしているらしい。奮闘の日々ですね。

そうですね。とくに演奏会に向けて練習の時間を確保するのがたいへんです。今、娘は幼稚園に通っているのですが、朝、支度をして送り出したらピアノに没頭。娘は家にいるときも比較のおとなしくしてくれるので、同じ部屋で私はピアノ。でも集中できずにイライラすることがしばしばです。ただ、最近、娘もピアノのお稽古を始め、練習の大切さが分かるようになってきたようで、私を応援してくれます。母娘で一緒に日課に取り組んでいます。

最近、私より歳若い器楽演奏の伴奏をする機会が増えました。すると、単なるサポートではなく、掛け合いのおもしろさを感じることが多くなりました。それが自分の成長につながると思えるようになってきました。今は家庭・育児と両立させることに精一杯ですが、いずれソロ活動において新たな挑戦をしようという気持ちを募らせています。

取材・記事 大阪新音

\*インタビューは2024年1月に行いました。

長富さんのピアノリサイタルシリーズ『Colors—いろどり—』もこれまで3回目、最終回となります。テーマカラーは黄色です。「2020年にリサイタルシリーズの提案をいただき、『Colors』をテーマに決めるとき、3回でどんな〈色〉と曲を取り上げるか、ずいぶん思案しました。それは、人の心を映すとともに、お聴きくださる方にイメージしていただきやすい〈色〉と音楽でなければなりません。それで第1回に紺色、次の第2回は赤色としたのですが、第3回をどうするか…考えた結果、黄色にしました。込める『想い』は、祈り・安らぎ・穏やかな喜びなどです。シリーズの内容を考えていた頃、新型コロナウイルス感染症でパニックになっていたので、そのころ黄色を選ぶ動機の一つにありました」

「今、コロナ禍は落ち着いてきましたが、『Colors』の内容を考えていた当時には思いもよらなかったことが

# 聴き手の皆さんも、各曲自由に色付けを

## 演奏曲 ミニ紹介 演奏順検討中につき作曲者50音順で紹介

### ・ショパン：舟歌

ベネチアのゴンドラ漕ぎの歌をモチーフとしたもので、ひじょうに整った形式かつ主題も精ちに展開されている傑作。1845年の作曲当時、ショパン(1810-1849)は病状や身辺の状況が芳しくなかった。しかし、曲にはきらめく水面や舟の上で愛をささやく恋人たち…といった情景を想起させる明るさがある。(約9分)

### ・ショパン：バラード 第3番

音楽におけるバラードは、19世紀中頃まではもっぱら歌曲における形式だった(ゆえに和訳は「譚詩曲」とされている)。ショパンはそれを器楽分野に持ち込み、“ピアノ音楽におけるバラード”を作り出した。ショパンは4曲のバラードを遺しているが、その中で第3番(作曲は1841年)は最も独創的と評価されている。他の3曲にくらべて軽快で優美なのが特徴だ。(約8分)

### ・ドビュッシー：喜びの島

ドビュッシー(1862~1918)が、ルーブル美術館に展示されていたジャン-アントワーヌ・ヴァトーの「シテール島への船出」に想を得て作曲したといわれている作品(1904年作曲)。美と愛の神アフロディテが西風に吹き流され、楽園であるシテール島にたどり着く…という物語で、ドビュッシー作品の中では最も技巧的、また演奏も難しい作品の一つといわれている。(約7分)

### ・モーツァルト：ピアノ・ソナタ 第11番「トルコ行進曲付き」

モーツァルト(1756~91)の第11番目のピアノ・ソナタとなっているが、いつ頃どこで作曲されたか不明。しかも、「ソナタ」というものの、急-緩-舞-急の古典派ソナタの定義にしたがわず、最初の“急”楽章を省いた、緩-舞-急の3楽章仕立てになっている。曲名の「トルコ行進曲付き」は、第3楽章がトルコ行進曲であることに由来している。(約23分)

### ・吉松 隆：四つの小さな夢の歌

吉松隆(1953~)が1997年に作曲した小品集で、春=5月の夢の歌、夏=8月の歪んだワルツ、秋=11月の夢の歌、冬=子守唄、と季節の美しさが情感豊かにつづられている。(約8分)

### ・リスト：超絶技巧練習曲 第5番「鬼火」

リスト(1811~86)の、ピアノのための12の練習曲「超絶技巧練習曲」(完成は1851年とされている)の5番目の曲。曲名の鬼火は、暗い夜の森などに現れ、人をだまして沼に誘い込んだりする“妖怪”で、もとは悪者や自殺者、洗礼を受けずに死んだ幼児らの魂とされている。リストはこの空想的で正体のないものを、細密な技巧で表現している。“超絶技巧”の名にふさわしい難曲。(約5分)

### ・リスト：孤独のなかの神の祝福

リストが1848年に作曲した、全10曲から成る「詩的で宗教的な調べ」S.173/R.14 A158の第3曲で、曲集の中で最も大きなスケールの作品。今回のように単独で演奏されることも多い。リストの宗教的・内省的な側面を象徴する傑作と評されている。とくに主題部分は美しく瞑想的である。(約16分)

\*当日、演奏曲目が変更されることがあります。